

明治初期の日曜学校

—— 揺籃期の特色 ——

佐野安仁

- 一 日曜学校開始の過程とその特色
 - (一) 外国人居留地内の日曜学校
 - (二) キリスト教系学校と日曜学校
 - (三) 禁教高札の撤廃直後の日曜学校
- 二 「安息日」と日曜学校
 - (一) 日曜日の制定
 - (二) 安息日学校から日曜学校へ
- 三 各地での日曜学校活動——神戸から岡山へ——
 - (一) 日曜学校相互交流の芽生え
 - (二) 開拓伝道による農村での日曜学校
- 四 日曜学校と小学校教育
 - (一) 鹿児島メソジスト教会の事例

(一) 常総教会の事例

(二) 長野県下の類似例

五 日曜学校の内容

(一) 日曜学校プログラム

(二) 日曜学校教材

(三) 日曜学校の教授法

(四) 日曜学校での試験

(五) 日曜学校行事

わが国プロテスタント・キリスト教の伝道が開始されて以来、百年を経過した今日、その一世紀の歩みは、さまざまな視点から反省と共に研究、回顧されてきた。だが、キリスト教伝道にかなり重要な役割をになったはずの日曜学校については、これを取りあげた研究は、それほど多くはない。

例えば、日本への宣教教化の使命をたずさえて来日した各派宣教師は、全く未開拓なわが国での伝道活動において日曜学校活動をどのように位置づけていたのであろうか。これと関連して、わが国の日曜学校は、どのようにして開始され、どのように発展したのだろうか。また、わが国での福音宣教に日曜学校は、どのような役割を果たしたのか。さらに、その日曜学校にどのような人びとが出席し、その人たちにどのように福音が伝播されたのか、日曜学校の生徒が、どのような意図で出席し、また、そこで何を学んだのか。加えて、彼らが信仰の維持、継承者になりえたのか等々の問題について、どこまでの反省、検討がなされたのだろうか。

一般に平信徒の伝道活動の場ともいわれた日曜学校には多くの信徒がこれに奉仕し、また教会の主要な事業として多くの時間と資力がこれに投入されてきた。日曜学校活動は、各個地域教会を真に支えた信徒を輩出し、また、その信徒によって地域での伝道活動が継承された。このような顕著な実りをみないまでも、日曜学校によって与えられた影響力は、さまざまに及んだものと思われる。

そこでこれらの問題を考察するにあたって、まず本稿ではわが国日曜学校の揺籃期的をしぼり、日曜学校開始の事実経緯を考察し、その特色について言及してみたい。この考察には諸種の伝記、学校史や、『七一雑報』の記事および各個教会の歴史を手掛りとして用いた。なお、日曜学校という名称については、当時「安息日学校」(Sabbath School)とも、また「ゾンデー・スクール」とも呼称されていた。本稿は、引用文以外では日曜学校の名称で統一した。

一 日曜学校開始の過程とその特色

周知のように、日曜学校は、産業革命の影響下にあった一七八〇年、ロバート・レイクス (Robert Ranks) によって開始された。イングランドのグロスター市において、ピン工場に働く貧しい子どもたちの惨状をみたレイクスは、六歳から一四歳までの子どもたちのために民家を借用し、有給の女教師と共に、文字や教会教理問答を教えたのが日曜学校の起源とされている。この日曜学校は、レイクス個人の発意によるもので、一種の慈善学校的な性格をもち、教育内容も宗教教育に限定することなく一般教育をも実施した。教会に直属する学校ではなく、いわば一信徒の自発的な教育事業であった。

こうした日曜学校の起源の背景には、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどによる新しい児童観と児童教育に対

する画期的な提唱および実践があり、また、それに覚醒された時代の動向があった。¹⁾

レイクス式の日曜学校は、ジョン・ウェスレー(J. Wesley)によって改革され、教会の主要な事業として位置づけられ、発展、継承をみた。その意味で、日曜学校は「レイクス之を初めウェスレー之を全ふせり」ともいわれている。この日曜学校が米国に伝播し、その活動が開始されたのは一七八〇年代の後半であった。一九世紀に至り米国の日曜学校は隆盛時代を迎え、学校自体の性格も変化してきた。その性格の変化をみると、まず第一に、レイクス式の個人の事業から教会に属する事業として成長してきたこと。第二に、教会の設立をみない新開拓地では、日曜学校の開始をもって伝道に着手し、それを布石に教会を設立するという事例が示すように、伝道上重要な意味をもつようになってきた。第三に、日曜学校の拡大、発展に伴って多くの平信徒が無報酬で日曜学校教師として奉仕するようになってきたことである。つまり日曜学校が平信徒の伝道活動の場となってきた。第四に、各教会の日曜学校が相互に協力しあう連合的な組織が結成されはじめたことである。地域的な日曜学校同盟の結成から、さらに全米的な大組織へと発展し、一八二四年には「アメリカ日曜学校同盟」が組織されるに至った。第五に、日曜学校の教育内容が充実、進歩してきたことである。学課の課程が整備され、教案、教材、図書が各教派の出版機関から刊行されるようになった。こうした英米での日曜学校が、わが国において開設されるに至った契機は、一八五九年(安政六)のプロテスタント宣教師の来日にある。この頃、米国では、第三回米国民日曜学校大会が開催され、また、イリノイ州では、日曜学校運動が一段と活発になり、宗教教育の必要性を論議する熱烈な大会が開催された。開港を期に来日した宣教師およびその夫人たちの背景に、こうした米国での日曜学校運動の盛り上がりがあったことをみると、やがて、わが国において着手する福音宣教の一環に日曜学校開始への大きな意欲が秘められていたものと推察される。

ところで、この日曜学校活動が公認されたのは明治六年（一八七三）二月の禁教の高札が撤廃されてからのことである。これに至るまで、来日した宣教師は指定された治外法権の居留地内で、時に備え、時の到来を待ったのであるが、この時期（安政六年—明治六年）に実はわが国、日曜学校の苗床が形成された。つまり居留地内において外国人子女のために日曜学校が開設され、また、宣教師によって開始された学校内にも日曜学校が併設されている。これらの日曜学校を苗床として、禁教の高札撤廃後、聖書講義所的な性格を兼ねた日曜学校が、開港地を中心に芽生え、明治一〇年（一八七七）頃より、さらに農村地域に、いわば教会形成の布石としての日曜学校が開設される。さらに、教会創設から、その拡張事業として、日曜学校が伝道的役割をになって開設されていく。このような経緯をみると、わが国の日曜学校は、(一)、外国人居留地内の日曜学校、(二)、キリスト教系学校内の日曜学校、(三)、開港地を中心とした日曜学校、(四)、教会形成布石としての農村地域の日曜学校、(五)、教会の教勢拡張の拠点としてのいわば支所の日曜学校に大別して、その成立過程をみる事ができる。これは、キリスト教伝道の歩みをも物語るもので、わが国福音宣教の歴史が一面において日曜学校活動を前衛にして展開されたことを意味する。

(一) 外国人居留地内の日曜学校

まず、居留地内日曜学校の存在を伝える記事を挙げてみよう。

「バラ夫妻の日本伝道の出発は、仏教寺院（成仏寺）を本拠にして始められ、その本堂が日曜礼拝の教会堂となり、横浜居留の宣教師や信徒たちが小舟に乗って礼拝に集った。宣教師たちの子供のため、バラ夫人などが日曜学校を受持った、クリスマス礼拝も、パーティーもこの成仏寺の本堂で行なわれた。」⁽⁴⁾ (一) 内筆者、以下同)

バラ (J. H. Ballagh) とその夫人が来日したのは文久元年 (一八六一) であり、かれらは、神奈川の成仏寺に居住することになった。そこには、ヘボン (J. C. Hepburn) 、ブラウン (S. R. Brown) の家族、ゴープル (J. Golpe) が起居していた。ここで注目すべきは、「バラ夫人などが日曜学校を受け持っていた」という記事である。この確証はないのであるが、成仏寺の本堂でクリスマスの礼拝を行なったとも伝えられており、日曜学校もあったのかもしれない。つぎに、ヘボンの「日本に於ける北米長老ミッシヨンの起源」によると「一八六二年 (文久二年) の秋、徳川幕府の依頼を受け、その派遣したる高官の子弟九名に英学の教授をする様にとのことで、私は喜んで之に応じ、日本人を教育すべき私の最初の努力が始まった。私は一八六三年 (文久三年) の夏までこれを継続したが国内の政治上の動乱のため、そのクラスは中止のやむなきに至り、青年等は各自その家に帰らなければならなかつた」とある。これはヘボン塾のはじまりといえよう。期間は一年足らずであったが、大村益次郎、原田五一らが学んでいたようである。

ヘボンは文久二年 (一八六一) 一二月に成仏寺から横浜の居留地三九番地館に住居を新築し移転している。この建物は一部が施療所として用いられ、また、一部が外国人の宗教的集会所として利用された。前述の記録から推定すれば、成仏寺で開始されたヘボン塾は、横浜の居留地に移転されたことになる。また文久三年 (一八六三) 帰国中のヘボン夫人が再来日し、一月に、家塾を開始している。夫人は、文久元年 (一八六一) 夏、暴漢に肩を痛打され、病氣静養を理由に一時帰国していた。夫人の家塾開始によりヘボンは専ら医療活動に従事することになった。

ヘボン夫人の家塾には、高橋是清、鈴木六三郎、林薫、益田孝、服部綾雄、三宅秀などが入塾していた。始めは女子を主とした塾であり男子の入塾で共学となった。わが国では共学の最初の事例とされている。

ところで『ドクトル・ヘボン』(高谷道男著)によれば、横浜居留地三九番のヘボンの住居 (施療所) は「日本人の

日曜学校及び英学塾にも用いた」とあり、また「日本に於ける日曜学校が、文久三年このヘボン塾から始められた……」と記述されている。また『指路教会八十年史』によれば「指路教会日曜学校は……文久三年（一八六三）三月、開港まもない横浜居留地三九番館のヘボン博士の施療所に於いて、安息日学校として博士夫人によって始められた」とあり、生徒は「……これと殆ど時を同じくして始められた英学塾の生徒ばかりであり、彼らの多くは横浜駐屯英国歩兵第十連隊、俗に「赤隊」といった軍人の子供であったといわれ、この外人の子供たちにまじって日本人の子供も数名いたのであった」とある。

この二つの記事に共通することは、文久三年にヘボンの施療所において日曜学校が開始されたという点である。この日曜学校にヘボンが依託された大村ら九名の青年が出席していたのか、またヘボン夫人の塾生であった高橋らが出席したのかは明確でない。ただし、ヘボンは「成仏寺時代の幕府の委託学生の外に医学生、男子女子の英学塾生に対しても日曜学校に参加を許した」ようである。また「英学塾の生徒ばかりであり、彼らの多くは……「赤隊」といった軍人の子供であった」という記事からは、英学塾の生徒が軍人の子女を主としたものやら、日本人が主であったのか曖昧であるが、「……日本人の子供も数名いた」ことが事実とすれば、キリスト教禁制下にあった当時としては注目すべきことである。

こうした記事に対して、『日本日曜学校史』（日本日曜学校協会編纂）は「……元治元年即ち一八六四年六月第一日曜に、驚くべき喜ぶべきことが起った。横浜の外人居留地三十九番館なるヘボン博士の施療所に於て『第一日曜学校』と称するものが開かれたのである。……バラ宣教師が先生となり、生徒はブラウン宣教師の子供ハラン、ハワード、横浜駐在米國領事フキッシャーの子供メリー、ジョージ及びフウと呼ぶ支那人の子供などであった。……そこには

日本の子供は一人もゐなかつた……と記述している。⁹⁾この記事もヘボンの施療所における日曜学校である。しかし、文久三年（一八六三）と元治元年（一八六四）との相違があり、「日本人の子供がいた」というのに対し「一人もいなかった」という点でも異なっている。

ヘボン夫妻は、慶応二年（一八六六）九月『和英語林集成』を印刷するために岸田吟香と共に上海の美華書院に赴くことになり、ヘボン夫人家塾の塾生はバラ夫人の下で学ぶことになった。ヘボン夫人家塾は文久三年から慶応二年までであった。慶応三年（一八六七）三月に横浜に戻ったヘボン夫人は、「はじめて五、六人の男女等を集めて、初等教育を施し、英語を手ほどきした……」¹⁰⁾と伝えられている。

さて、「初等教育を施し、英語を手ほどきした……」という伝承は、『日本日曜学校史』では「……五、六人の日本人男女児を自宅に集め、英語の指導を主にして、米国の小学校になぞらへた普通教育の要素を加味したものを授けることを始めた……」¹¹⁾とある。また、『日曜学校の歴史』では「アメリカ式初等教育」をはじめたと記述している。¹²⁾これらの記事で注目すべきことは、この初等教育の対象が日本人の男女児であったということにある。このヘボン夫人の事業は、明治三年（一八七〇）まで男女共学であった。その間、どのような生徒が、このヘボン夫人の下で学んだかは明確でない。前述の高橋是清は慶応二年（一八六六）、横浜大火の頃、バラ夫人の下で学んでいたし、林薫もヘボン塾に通ったのは、三年間で、慶応二年には英国留学を命ぜられ一〇月に横浜を出帆していた。したがって、慶応三年のヘボン夫人の初等教育は、その目的からみて文久三年に開始した家塾とはやや異なり、そこに集められた生徒たちも入れ替っていたと推定される。だが、ここで看過できない点は、そこに集められた生徒たちが、すでに開始されていた日曜学校にも出席していたことである。「山本秀焯もこの日曜学校で学んだ一人である」¹³⁾といわれている

ように、ヘボン塾および夫人の教育の下にあった生徒、さらにバラ夫人の下に学んだ生徒たちも、施療所に開設されていた日曜学校に出席していたとみられる。これは「日本人のみの宗教的集会を行う事は遠慮したが、外国人の子供と一緒に日本人をも加えて日曜学校を行った」と語られていることから推察される。

これに対し、ヘボンの施療所における「第一日曜学校」（元治元年）には一人も日本人はいなかったとする『日本日曜学校史』は、慶応三年のヘボン夫人の初等教育開始ころには「その子供達の或者は、恐らく日曜学校へも出席するやうになつたらう」と推定している。多分、この記述にみるように、日本人の子女が日曜学校に生徒として出席するようにしたのは慶応三年以後のことであり、それ以前は、むしろ外国人子女を中心とする日曜学校であったと思われる。その外国人の子女のための日曜学校に、英学塾の生徒が英語学習を兼ねて出席したのではないかと考えられる。したがって文久三年から明治三年までを通観して、何らかの形でこの日曜学校に出席した者を生徒とみなせば、当初より日本人をまじえた日曜学校であったとみることも可能である。

要するに、わが国における日曜学校は、文久三年か、それとも元治元年とみるかは別にして横浜の外人居留地三九番館のヘボンの施療所に創始され、ヘボン夫人らの献身によって展開されたといえよう。とりわけヘボン夫人は、日曜学校隆盛期の米国において、教師としての経験を積んでいた。また、中国伝道中に三人の子供を失い、米国にても子供を失い、唯一の子息、サムエル・ヘボン (S. Heburn) を故国に残して来日したことから胸中には子供への寂しく悲しい思いがあった。その慰めとなつたのは日本人子女の教育であった。その教育はヘボン夫人の塾生であった林薫が(当時十三歳)、「恰も吾兒の如く愛撫せられた。……成長後と雖も子を息子と呼んで居た」と語っているように、深い愛情によるものであった。

へボン夫人は夫と共に明治四年（一八七二）、『和英語林集成』第二版の印刷のために上海に赴くことになり、彼女の生徒のうち女子生徒は明治二年に來日した、ミス・キダー（*Ms. Kitter*）の下で学ぶことになり、やがてフェリス学院となった。また、男子生徒は、ジョン・バラ（*J. Ballag*）の指導の下で学ぶことになった。明治八年（一八七五）へボン塾はジョン・バラ学校となりやがて明治学院へと発展する。さらにへボン塾—ジョン・バラ学校で学んだ青年らにより明治七年（一八七四）指路教会が創設される。

キリスト教禁制下において泰西の新しい知識を求めた青年たちに、へボン塾は、そしてまた夫人の家塾は単に英学とか新知識にとどまらず、日曜学校を通じ、また生活を通じて福音を伝播しつつあった。へボンの施療所に開設された日曜学校は、その詳細については明確にしないが、わが国日曜学校の苗床とみることができ、また、その果たした役割にも周知とはいえず注目しなければならない。

(二) キリスト教系学校と日曜学校

明治二年（一八六九）に來日したミス・キダーは、その年一〇月、新潟に赴くが、明治三年に横浜にもどり、九月より居留地三九番のへボンの施療所にて英語の教授をはじめた。当初女子三名、男子四名に英語を教えていた。この明治三年一〇月、キダーのフェリス宛書簡によれば、「以前からへボン夫人は、生徒たちを集めて立派に学校を経営しておられました。読み書き、算術もできます、唱歌は教えていませんでしたが、女生徒だけ教えるようになったら、音楽も教えたいと思います。女生徒二人と男生徒一人が日曜学校に出席しています……」とある。前述のようにへボン夫妻が、明治四年、上海に赴くことになり、夫人の下で学んでいた女生徒をキダーが預ることになった。同時

にキダーの下で学んでいた男生徒はヘボン夫人を通して他の教師の下で学ぶことになった。

ミス・キダーの書簡から明治三年に施療所内の日曜学校に日本人生徒が出席していた事実を知ることができる。また、書簡にあるように、明治四年九月から女生徒を対象に英語で讚美歌を教えはじめた。明治五年に至り、ミス・キダーは、神奈川県権令、大江卓の好意で野毛山の官舎の一部を借り、そこで授業をすることになった。このとき、日曜学校を、ヘボン塾から野毛山に移すことになった。明治八年（一八七五）には山手一七八番地に校舎、寄宿舎を落成し、フェリス・セミナリーとして女子教育の発展を期することになる。

ここで注目すべきことは、日曜学校が、明治五年以降、ミス・キダーの学校内に開設されたことである。「横浜リホームド・ミツシヨン学校規則書」によれば「本校は日本に在るアメリカリホームド・ミツシヨンに属する普通学校にて英学と日本小学科及び漢字を教ふる所なり、学科は五年を以て卒業期限とす……」とあり、「毎日曜日普通学を休業して神学を教授すべし……」と日曜学校についても規則化している。この規則は明治一〇年前後のものであるが、すでに記述のようにミス・キダーは、平日の授業の外に、日曜学校を自校内で行なっており、一方においては東西の進歩した文明に目を向けさせ、もう一方においては、その文明の基礎たるキリスト教の永遠の真理にふれさせようとした。ミス・キダーは、基督教化は、直接伝道によるよりも、普通学の教授を通して間接的に伝える方が、將來大きな効果を取め得ると力説していた。つまり普通学は、神を知り、神の言葉を受容、理解するに至る知性、心性の育成を目指すのであり、それによって諸知識の源泉たる神に通ずる靈性の育成を課題とした。

明治一〇年前後、こうしたキリスト教系学校が相継いで創設され、東京では、そのキリスト教系学校の生徒を主体とした日曜学校の大集会が開催されている。『七一雑報』（明治一二年五月三日）によれば、「(五月一日)午後東京

築地新米橋際の会堂に催されし日曜学校の大集会は中々に盛會にて銀座原女学校（日本長老会）築地ヤングメン女学校（米国長老会）同じく海岸女学校（メソヂイスト）同ガンブル女学校（英長老会）駿河台キダー女学校（浸礼会）同ハッドン学校（メソヂイストの一派）本郷ブランシー女学校（米エビスコバル会）総て七校の生徒並に日曜のみの生徒凡二百名斗り外に傍聴人二百名都合四百名なれば流石の大堂も立錫の余地もなく……」とある。

この記事によると、まずキリスト教系学校七校が参加しており、その諸学校が日曜学校活動に関与していたことを示している。出席者は「七校の生徒」と「日曜のみの生徒」となっているが、その大半は前者であったとみられる。その意味では、主としてキリスト教系学校の生徒による日曜学校の大集会であった。つぎに、大会は、ソーパー（J. Soper）の司会で、津田仙（メソヂイスト会員）が「日曜学校は国家緊要なる事について」、田村直臣（日本長老会員）は「日曜学校の歴史と該校を盛大にすべき事について」、奥野昌綱（麴町キリスト教会仮教師）は「安息日を守るべき事について」、フルベッキ（G. F. Verbeck）は「日曜学校の教師並に生徒を勧諭する為に昔しの伝道者の美事について」それぞれ演説している。

これらの演題からみれば、恐らく参加生徒に日曜学校への出席を奨励しただけでなく、彼女らがやがて日曜学校の指導的役割をになうよう説き、また期待を寄せたことであろう。

前記の『七一雑報』にある七校の外に、横浜には「ミッション・ホーム」（横浜共立学園）が明治四年（一八七二）に、長崎にはスタウト夫人（Mrs. Stout）の家塾が明治五年（一八七二）に開設されていた。明治八年（一八七五）に至り神戸には神戸女学院が、同九年には、京都に同志社女学校、同一年には、梅花女学校が大阪に創設された。また、明治十一年（一八七八）までに立教、同志社、青山などの男子校も設立されるに至った。

こうした諸学校において、例えば神戸女学院において「其頃は通学生が極僅かで寄宿生の方が多かったが、毎日曜日には舎生全体が列をつくり甲賀さんに引率されて……教会に通ふのであった。」(『神戸女学院百年史 各論』)と第一回の卒業生が回顧しているように、日曜日は教会に出席している。また、梅花女学校では、宣教師レポートによれば、明治一二年一二月、生徒数は二三名で、そのうち教会員は五名、安息日学校に出席する生徒は一八名と報告されている。このように、キリスト教系学校では、日曜日、多くの生徒は教会に出席している。その生徒たちが、どれほどの信仰覚醒をえたかは明確でないが、卒業後、各地で日曜学校の協力者となった例¹⁸⁾、信仰の証人となった例²⁰⁾をみると、明治初期キリスト教系学校内での日曜学校活動や、教会との密接な関係は、少なくとも日曜学校に対する理解者と協力者を輩出する母胎となった。ちなみにフェリス女学院、神戸女学院、同志社女学校、梅花女学校などのそれぞれの学園史をみると、第一回の卒業生のうち牧師夫人となる者、教師となる者が多く、教会で、あるいは学校で日曜学校の協力者となっている。

(三) 禁教高札の撤廃直後の日曜学校

周知のようにヘボン塾、バラ学校、ブラウン塾からわが国プロテスタント・キリスト教の伝道者が輩出され、やがて教会を設立することになる。米国において日曜学校が教会創設に先行して開設された事例が多くあるように、わが国においても、教会設立の前衛として、日曜学校が、まず開始され、それが発展して教会となった例は少なくない。ただし、その日曜学校が、果して日曜学校と規定しうるかには、若干の疑問はある。ある事例では青年を対象として安息日に開かれた聖書講義、聖書会読、聖書研究の集会を日曜学校とみなしており、またある事例では、対象を児童

に限定して、児童向きのイエス伝を教える場を日曜学校として開設している。さらに、対象を限定することなく、初歩的な聖書研究を行なっている例もある。しかし、これらのものは、いずれも「安息日学校」と呼称されていたのである。

まず、第一の事例を代表するものとして、弘前日本基督公会（明治八年一〇月創設）の布石となった安息日学校をあげることができる。

弘前地方にキリスト教が初めて伝えられたのは明治五年（一八七二）とされている。洗礼は受けなかったがバラに師事した成田五十穂なる人物が、明治五年に帰郷し、弘前英学校の教師となった。この成田が「耶穌の美を宣揚したりき、之を津軽地方の人、西教の美を聞く始とす」（『七一雑報』明治二年二月二日）とあるように、この地方にキリスト教を伝播した。その年（明治五年）、弘前英学校（東奥義塾）に横浜から宣教師ウォルフ（C. H. H. Wolf）が、英語教師として招かれ、以来この地に「聖書会読」が毎安息日に開かれるようになった。

明治七年（一八七四）には宣教師イング（J. H. G.）がウォルフの後をうけ英学校の教師となり、安息日ごとに午前中自宅で「聖書会読」を行ない、午後は学校の講堂にて講義を公開していた。この講義の場所は内外諸種の非難により菊地三郎の自宅に移された。ウォルフからイングに継承された安息日の「聖書会読」の集会には、後に牧師として活躍する山鹿旗之進がいた。かれによれば、イングが英語組をもち、邦語組は、すでにタムソンから明治五年に受洗した津軽出身の本多庸一が担当した。また、註解書にはクラークのコンメンタリーなどが使用され、『天道溯源』が輪読されていた。⁴⁰⁾

この書生を対象に安息日ごとに定期的に開かれた「聖書会読」の集会を「安息日学校」とみたのであるが、これ

は、いわば日曜学校の芽生といえよう。この集会から明治八年、本多庸一の働きもあって十数名の青年が入信を決意し弘前教会が創設される。教会創設後の明治一〇年四月、「さまざま不便を感じ」ということで「聖書会読」は、日曜学校として組織された。「……校長に本多庸一氏、同補佐に佐藤愛麿氏、書記に伴野雄七氏、同補佐に古坂啓之助、書庫掛に田中五郎、同補佐に伊東基、教師はジョン・イング（第一英語聖書会読）、本多庸一（第二邦語聖書会読）、珍田捨己（第三邦語聖書会読）、今規雄（第四邦語聖書会読）、芹川得一（第五邦語聖書会読）の五氏を挙げ此処に完全なる学校組織をなせり」とあるように学校としての組織を整備している。注目すべきは「聖書会読」が五クラスになったことであり、対象によりクラスが編成されたことである。だが、「聖書会読」という点では、その内実に大きな変化はなく、当初の「聖書会読」の集会の発展、継承とみてよかろう。したがって、「聖書会読」の集会を「安息日学校」とみていたことになる。

こうした例はスタウト夫妻の活動にも認められる。フルベッキの後を継いで新美術館で英語を教授したスタウト (H. Stout) は、自宅で「聖書講義」を開始し、それが長崎での教会形成の布石となった。スタウトの場合には「聖書講義」とされているが、「聖書会読」と内容的には大きな相違はなかったと推察される。またそれが安息日に定期的に行なわれたという点では、弘前の場合と同様に「安息日学校」であり、日曜学校の芽生といえよう。そこには瀬川浅らがいた。

さて、第二の事例は、明治六年（一八七三）一月七日に神戸元町に開校された安息日学校である。これは弘前や長崎の例とは異なる。すでに聖書講義所が開設されており、その受講者とは別に、児童を対象として開始されたものである。神戸には、明治三年（一八七〇）、その前年に来日した宣教師グリーン (D. C. Greene) が着任し、明治五年

(一八七二)に宣教医ベリ夫妻(J. C. Berry, Mrs Berry)が、また、その翌年にはタルカット(Miss. E. Talcott)ダッド
ニー(Miss. J. E. Dudley)が来神した。

D・C・グリーンは、明治五年ころから日本人青年に聖書を秘かに教えていたが、禁教の高札が撤廃されたのを契機に、神戸元町で開業していた前田泰一の書店の一室で「聖書研究」を青年らと開始した。この聖書研究のグループによって、明治七年(一八七四)四月一九日に「摂津第一基督公会」(神戸教会)が創設される。

ところで、この流れと平行して『日本日曜学校史』によれば、明治六年一二月、宣教医ベリーを校長とする日曜学校が開始された。ベリーは、来神まもなく神戸にて医療活動に従事しつつ福音の宣教にも献身していた。そのベリーを校長に「教師はグリーン夫人、デビス夫人、ダッドレー氏、外四人の邦人で、五歳からの児童が入学した……」と前掲書は、この日曜学校を紹介している。前述のようにこれは、「聖書研究」のグループとは別に「五歳からの児童」を対象とし、児童への伝道を意図して開校されている。また、宣教師四名、邦人四名と八名の教師からなる陣容は、組織的にも、内容的にも、その充実度を物語っている。恐らく宣教師主導で運営されたものと推察されるが、当時わが国の日曜学校としては、最も整備されたものであったといえよう。

この日曜学校は前述の「聖書研究」のグループと共に神戸教会創設の礎石となるが、明治八年(一八七七)六月に教会信徒と合同で野外礼拝を「和田の崎」で行なっている。これは翌年の九年にも実施されており、『七一雑報』(明治九年六月三日)は、それを次のように報じている。「安息日学校の信徒が遊びしはなし、神戸元町にある耶穌教会堂に出席する安息日学校の信徒が兼て一日遊行を期し去る十四日早朝より右会堂にあつまり大人も小兒も男も女もたちまじり惣計百五十人ばかり各人力車に打のり種々の旗旗を翻へし意気揚々として出たちたり其旗は、第一に日

の丸、第二……我らの手びきは神のことば也、第三耶穌は世の光なり、第四は、耶穌は聖書の学校、第五に耶穌われを愛す、第六、神は我らの父、人は我らの兄弟なり、第七に我らの力は神のめぐみなり、第八義は開化の基、第九に耶穌ははらべのともと記るさる……聖歌をとなえ、神に祈禱し各愛心を以つて相親み互ひに相害することもなく楽しみは之れぞ……」と、また「鳴物等を携へし飲酒のあそびにあらねど……」とあり極めて興味深く報じている。明治七年に創立されたこの教会が、八年、九年とこうした行事を実施したことは注目すべきことで、恐らく、日曜学校行事の初穂であったといえよう。

第三の事例は、宣教師ソーパルの日曜学校である。ソーパル (J. Sogal) は、米国メソヂスト監督教会外国伝道局の年会(一八七二)において決議された日本伝道のために派遣された宣教師で、明治六年(一八七三)八月に来日した。『日本日曜学校史』によれば、明治六年一月二日に、ソーパルは東京築地明石町の自宅で、日曜学校を開始した。ソーパル夫人が校長になり、ホイッチン夫人、市川夫人外一名が教師になり吉益亮子が通訳であった。

ソーパルは、津田仙の紹介で古川節蔵の南明館と称する英学校で英語を教授しつつ、日曜日には聖書の講義をした。津田夫妻は明治八年一月にソーパルから洗礼をうけ、また、その二週間後、古川も受洗した。この洗礼式は築地明石町のソーパルの自宅で行なわれたものであり、ソーパルの自宅は、その後、築地メソヂスト教会として借用されることになり、明治一〇年八月に明石町に会堂が設立される。したがって、ソーパルの日曜学校は築地メソヂスト教会の布石であった。明治八年二月には、マクレーらによって横浜メソヂスト教会が創設され、同時に安息日学校も開始された。

ところで、明治六年一月から開始されたソーパルの日曜学校は、田村直臣によれば、⁽²³⁾「学生のバイブルクラス風

のもの……」であったと述懐されているが、単に学生だけでなく、例えば、前述の古川正雄（節蔵）の家族も出席していたようである。ソーバル夫人とか、ホイッチン夫人とか、市川夫人などの婦人が教師として奉仕していたことからみても、生徒層に幅があったと推定される。

この生徒の多様性を示す例は教会成立後の日曜学校にもよくみられる。例えば、静岡メソヂスト教会（明治七年九月創設）の場合であるが、明治一二年三月一五日の『七一雑報』によれば、「去る十日の安息日には静岡梅屋町三番地へ教師マクドナルド氏夫婦出席いたし日曜学校の規則を極定し……」とあり、その記事の続きに「日曜学校は重に幼童のために教えるよしなれど」と一応の規定を設けながら「随分老人も出席なしたり、しかし……年はよいたりとも教の道にとりくむ天父の御恵により生れ替りし小兒なれば教師先生方の御手につかまり、ここまでござれ福者進上の声便りに漸たてども、あくまにひかれて尻餅をつきながら一足二足歩行習う事なれば是も老いたる幼童なり……天父のきたれよとまねき玉へは毎日曜毎に出席して何卒真の道をたどり歩行事の出来るやうにいたし度望む……」とある。つまり児童のみでなく老人が「生れ替りし小兒」として迎え入れられていた。

以上、禁教の高札撤廃（明治六年二月）直後の日曜学校について考察したのであるが、これらは、わが国日曜学校の萌芽といえよう。その特色をみると、「外国から宣教師が渡来し、幾程もなく、会堂を建立してそこで説教するといふよりは、先ず窃かに自分の家庭で少数の有志を相手にバイブルクラスを催したのが起元ではなかるうか」と山鹿旗之進の述懐にもあるように、まず第一に宣教師によって開始されたものである。第二に、それは「バイブルクラス風」のものであったことである。だが、ソーバルの日曜学校や、神戸における日曜学校のように明治六年末の段階で単に宣教師個人の活動としてではなく、教師陣容を整え組織化しつつあったことは注目に値する。第三の特色は、

日曜学校が教会形成の素地になったという点である。

ところで、こうした特色をもった日曜学校を当時どのようにみていたのだろうか、明治九年一月三日の『七一雑報』では「ソンデイスクール」を「耶穌を講釈する処」とか「不信向の人を集むる学校」と説明している。前者は「バイブルクラス風」といえよう。しかし、同時に、それは後者の性格を伴っていた。その意味では、当初の日曜学校は当然に児童のみの学校ではなく、年令を問うことなくすべてを生徒として迎え入れ、まず福音の種を播く場であった。ここで看過してはならない点は、この日曜学校活動が、わが国プロテスタント・キリスト教伝道の重要な起点でもあったということである。

二 「安息日」と日曜学校

(一) 日曜日の制定

禁教高札の撤廃により、キリスト教伝道が公認されたとはいえ、当時の日曜学校活動をみると、事態は大きく好転したわけではない。周知のようにキリスト教に対する異質視は強く、その上、安息日の観念は日常化されていなかった。

わが国で太陽暦が採用されたのは明治六年（一八七三）一月であり、同時に七曜制が実施されることになった。明治九年（一八七六）四月、太政官布告二七号以後、従来の一と六の日を休業とする慣習から日曜日を休日とするようになりはじめたが、それは社会的に徹底されたわけではない。例えば「小学教則」（明治五年九月）は、日曜日を除いて教科の学習時数を規定したが、明治六年五月「小学教則改正」により一と六の日を除いて授業時数を定めなおして

いる。これは、日曜日が当時の実状に適しなかったことを物語っている。

ところで、キリスト教伝道にとっては、日曜日は、聖日、安息日として重要な意味をもっており、この日を中心に生活のリズムが構成された。この生活習慣を明治初当のわが国に導入し、その理解を求めることは至難であった。しかし、キリスト教にとっては、とりわけ日曜学校にとって日曜日を聖日として厳守する生活の徹底は、根本的要件であり、活動の重要な鍵であった。

そこで、明治九年の太政官布告二七号を契機に、キリスト教界は、安息日についての理解の徹底をはかっている。その一例を明治九年の『七一雑報』にみることができる。つまり『七一雑報』の紙上に「安息日」に関する記事が、太政官布告二七号との関連でかなり掲載されている。そのうち二、三をあげてみると、まず、明治九年四月二〇日の『七一雑報』に田中伝吉の投書記事がある。田中は、安息日を守らないと悪魔という大風に吹きさらされ、治療しがたき難病（私欲、傲慢、怨恨、憎悪）にとりつかれるから、世の人のために唯一の真神が定めた安息日には会堂に集まり、全知全能の大聖医に依頼し「ハイブル」という薬を服用すべしと論じ、そうすることが「天父一愛」の下に国の幸福、人間相互の和合に至ると結んでいる。

つぎに、明治九年五月一九日の『七一雑報』は、宣教師デホレストの「安息日の話」を掲載している。かれは、「……此の間政府から日曜日を安息日とせよとの五布告（ごふこく）がありました。是は何より幸のことで耶穌の信者のためばかりでなく実は大勢のために喜ぶべき五布告でありますゆえ何卒何方も政府の思召に従ひ六日の間よく働いて七日目の日曜日には必ず手足を休ませ仕事を止めて互に会堂に集り……神様の道に従ひ行なひを慎み自を看み人間の勉むべき務を勤め……」と論じている。

また、同年六月九日の『七一雑報』でも、引きつづき「日曜日の話」を太政官布告二七号との関連で論じ、特に、安息日を守るための生活習慣の転換法を提唱している。こうした安息日論は、明治一四年にも再三とりあげられ、安息日を「個人にとつての利益、家族にとつての利益、国家にとつての利益」として説き、その必要性が強調されている。

ところで、こうした安息日論によって、実際に、どれだけの人々が生活の習慣を変えたのかということになるが、『七一雑報』は、その事例をいくつか紹介している。⁽²⁵⁾それによると、都市と農村では、その地域性により困難の度合にかなりの相違がある。やむなく生業を転換した者もあり、居住地を移した者もある。生活の慣習は、大勢として変わることはなかった当時の社会で、安息日の厳守は、キリスト教入信者にとって極めて厳しい問題を内包していたといえよう。日曜日をもって国民的公休日が制定されたとはいえ、従来の慣習が強く存続していた当時、七曜制による生活リズムの定着には時間を要した。

日曜学校にしても、たしかに日曜休日制によって児童の日曜学校への出席は、容易になった。しかし、その観念が生活化されるまでには時間を要した。「安息日学校の先生たる者は、土曜日うちに一々生徒の家を訪問して翌日の日曜であることを知らせて歩いた⁽²⁶⁾」と伝えられるような状況はつづいたのであり、その意味で、日曜学校活動は、日曜日の観念の浸透、定着化という役割をも負っていた。しかし、明治九年の太政官布告二七号は、ともあれ、日曜学校活動にとっては大きな障害の解消へつながったとみななければならぬ。

(二) 安息日学校から日曜学校へ

「サンデー・スクール」という名称でわが国に導入された日曜学校は、当初「安息日学校」とも呼称されていた。

日曜日という観念の稀薄な当時、「安息日学校」が先行して用いられている。これが、大政官布告二七号により、「学校のない日に行く学校……それは日曜学校」といわれるようになってきた。少なくとも学校は日曜日を休日として全国的に徹底した。こうした経緯から、安息日学校が日曜学校として一般に呼称されるようになってきた。もちろん、キリスト教関係者の間では、明治九年以前も、また以後もこの二つの名称は平行して用いられている。これが日曜学校なる名称に一本化されたのは明治三〇年前後とされている（『日本日曜学校史』）。また、「明治二五年頃以前に於ては、『日曜学校』の名称は未だ正式には多く『安息日学校』と称されたものらしい」とみて、二五年以降から日曜学校が一般的に用いられるようになったとする見解もある。

その判断は、明治二三年（一八九〇）には、まだ、植村正久が『福音週報』に「万国安息日学課」という呼称を用いており、同年に本間重慶が大阪の福音社から出版した書物にも、『安息日学校読本』という書名がつけられており、美以出版社から刊行された島貫兵太夫の書物も「安息日学校教授法」となっている。それが、明治二七年頃から諸種の出版物では「日曜学校」と変っており、日曜学校がそれ以後、一般的となったとみる見方によるものである。だが、明治二八年には「京都同志社彰栄館で、京都市内安息日学校連合親睦会が開かれ……」とあるように公式に集會名として「安息日学校」が用いられている。

その点で、やはり明治三〇年前後より「日曜学校」に一本化されたとみるのが妥当である。前述の判断の外に、「学制」による小学校の発足で、平日に授業を行う「学校」が普及してきたので、それに対応して日曜学校という名称が使用されるようになったとする見方もある。また、「明治二十年代には明治憲法発布、教育勅語のかん発と国粹主義のぼっ発などにより欧化主義の潮は引いて、キリスト教はむしろ排撃されるようになり、『安息日学校』から

『日曜学校』と名称が変わった……』とみる見解もある。当初、「日曜日」という観念よりも、「安息日」の観念が強調されたとみなければならぬ。安息日は単に休日ではなく、安息日の思想こそが、キリスト教未開のわが国においては、まず普及されねばならなかったからである。

今日の「教会学校」(Church School)という名称は、教会論の見地から米国、日本ともに一九四〇年代に用いられるようになった。

三 各地での日曜学校活動——神戸から岡山へ——

禁教高札の撤廃以後、キリスト教の伝道は黙許され、また、明治九年(一八七六)の太政官布告第二七号により日曜日休日制が広く実施されるに及び、開港地に創設された教会は、それを拠点にやがて農村地域へと伝道を開始することになった。開港地の日曜学校は教会形成後は、教会の重要な伝道部門として整備されると共に、相継いで創設された諸教会の日曜学校との相互交流も芽生えてきた。

(一) 日曜学校相互交流の芽生え

東京では明治十一年(一八七八)までに一九カ所に教会が創設され、信徒数は男五十一名、女二八八名、この外に児童一一七名に及んだと『七一雑報』(明治十一年八月三―三〇日)は報じている。関西では、神戸教会に続いて八カ所に教会が設立されている。日曜学校もこれに関連して各地で開始されていた。

まず、それを神戸を中心とみると、兵庫教会(明治九年八月設立)では、明治七年(一八七四)にベリー(D. C. Berry)

の施療所にアッキンソン (J. I. Atkinson) が日曜学校を開始しようとした。これは町内官憲の反対によって実現しなかった⁽⁹⁾。だが、翌年には、その実現をみ、兵庫教会の創設に至っている。多聞教会は、明治一〇年一〇月二二日に、教会を設立し、その翌日の安息日より日曜学校を開始した。

神戸で注目すべきことは、明治一一年(一八七八)四月、神戸、兵庫、多聞の三教会が連合して日曜学校行事を実施したことである。これを『七一雑報』(明治一一年四月二六日)は「神戸、兵庫、多聞の三公会合併して安息日学校の遊びを和田の浜に催せしこと」として興味深く報道している。この行事は、同年五月一五日、東京築地新栄橋の会堂で開催された前述のキリスト教系学校を主体とした日曜学校の大集会とは異なり、教会を母胎とした日曜学校の連合行事であった。この三教会は、クリスマス祝会も合同で行なうなど、地域的な日曜学校連合を教会創設当初から試みていた。

やがて、これに明石教会(明治一一年一〇月一五日創立)の日曜学校も包括されることになり、明治一三年五月には兵庫教会の日曜学校と合同して舞子で親睦会を開いている。こうした連合が可能であったのは、一つには、いずれも組合系の教会であったこと、二つには関西在住の宣教師が、各教会の形成に関係していたからである。

東京で最初に開催された日曜学校の連合集会は明治一三年(一八八〇)と伝えられている。それは、ロバート・レイクスが日曜学校を設立してから一〇〇周年を迎えた記念行事であった。『七一雑報』(明治一三年七月一六日)によれば「去月(六月)二六日安息日学校設立百年目に当るを以て当地にても諸会の日曜学校新栄橋会堂を借り午後より集りを開きし……其人員は大凡五百人なりき而してフルベッキ氏バラ氏小川氏の演説ありたり……」と記載されている。この集会は児童より青年、成人の出席が多かったようである。だが「日曜学校」の起源を広く伝える集会とし

て、それが盛会であったことは、日曜学校活動にとって幾分かの意義はあったと考えられる。

やや、時期はおくれるが、大阪でも日曜学校教師の連合会議が開かれている。大阪、浪華、天満（明治二年一月一日設立）、島之内（明治一五年三月一八日設立）の四教会が、明治一九年に「日曜学校の課程」を連合で協議し、四教会が統一してコリント前書を日曜学校で扱うことにし、そのために教師が宮川経輝、本間重慶の両牧師のもとで聖書を研究することを決定している。

都市においては、こうした動きが、明治一年頃よりようやく芽生えはじめ、宣教師、牧師に代って平信徒が教師として奉仕するようになりつつあった。日曜学校相互交流の芽生えは、平信徒教師の交流と養成にも連動していた。

(二) 開拓伝道による農村での日曜学校

さて、『日本基督教教会歴史』³¹⁾は、明治一年に至るまでの状況を「尚各教会必ず之（日曜学校）を有するに至らざりき、但し未だ教会の建設なき所に日曜学校の已に存するありき、而して適々其已に存する者と雖能整頓完備せるにあらざりし……」と論じ、明治一年に「日曜学校を盛ならしむる方法を調査せしめなどしたりし……」と日曜学校歴史の一端を記述している。つまり、この頃より日曜学校の充実および拡張策を課題視したようである。

これと平行して関西では明治一〇年（一八七七）、沢山保羅の提唱で各地に伝道者を派遣するために「伝道会社」が設立され、新島襄もこれに参与し、翌年から同志社の学生が各地に開拓伝道に赴くことになった。その同志社の学生によって展開された伝道活動は、日曜学校を各地で開始する契機となり、やがて農村地域に教会が創設されるに至る。

(その一) 彦根伝道 彦根にはヘボン塾の門下であった中嶋宗達が明治一〇年に帰省し、医院を開業していた。彼は「明十社」(明治一〇年を意味する)なる求道者の集会を開いていた。また、宣教医テイラー(W. Taylor)も協力して、この地に施療所を設け、医療活動と共に伝道にも献身していた。ここに派遣されたのは同志社学生小崎弘道であった。注目すべきことは、小学校を彼の講義所としていたことである。また『七一雑報』(明治一〇年八月一〇日)によれば「一日、小学校生徒の為に講義があり、教員同席して三百余名の児童が集つた」とある。児童対象の伝道がこの地での日曜学校の歴史とどのような関係をもったかについては明確でないが、この事実は日曜学校活動に無縁ではなく特筆すべきことである。彦根教会は、本間重慶を牧師に迎え、明治一二年(一八七九)六月に成立した。

(その二) 岡山伝道 岡山にはすでに明治九年(一八七六)に、岡山県庁の役人であった中川横太郎に招かれた宣教医テイラーが伝道を開始していた。同志社の学生、金森通倫が派遣されたのは明治一〇年で、そのときテイラーが同伴している。同年五月にはアッキンソン、小崎、横山らも協力して伝道を展開した。翌年、吉田作弥が一月に、ダンドレー、バロス(M. Barrows)、山田良斉が三月に、また金森は夏期にそれぞれ短期伝道を行なっている。一月、中川横太郎は、ペリーに岡山伝道を要請し、明治一二年、ペリー(J. C. Berry)、ケリー(O. Cary)、ペター(J. H. Petree)、ウィルソン(J. Wilson)の四宣教師が岡山伝道に従事することになり、「ミッション・ステーション」が設置された。当時の県令、高崎五六は、四氏を優遇し、西田町にあった自宅の一部を彼等に提供している。

この西田町の高崎邸において宣教師らが最初に開設したのは安息日学校であった。明治一二年四月のことである。ペリーらは、児童、壮年、老年のクラスを編成し、児童に限定することなく、各年令層を包括する日曜学校をはじめたのである。⁽²⁸⁾

これとは別に「聖書研究会」も開かれていた。この年六月、金森は同志社を卒業し岡山伝道に専念することになった。岡山教会は、安息日学校を布石に、明治一三年（一八八〇）一月一三日に創設された。金森はベリーと協力して前年九月から総社、河辺、高梁、倉敷、天城、下津井、西大寺、笠岡、津山へも伝道の歩みを広げている。やがて、それらの地域にも日曜学校が開始されるに至る。

ところで、岡山の日曜学校は、神戸、明石以西では最初のものであった。この日曜学校と共に注目すべきは、『七一雑報』（明治一三年二月二四日）が報ずる「陶器製造所内の日曜学校」である。『七一雑報』によれば、「岡山には陶器を業とする阿部といえる人の有けるが此人如何の処よりか耶穌教は諸々の職業を励ますものなることを知、日々其職工場に來りて陶器に絵をかく所の職工五十名ほどに何卒聖書の教を聞きたまものと思ひ先頃既に一つの安息日学校を開きしが其開業式には県官の臨場もあり外国宣教師も出席、新島氏の演説もありて頗ぶる盛なりしと爾來は日曜毎にケレー氏出席して該職工に聖書を教ふるよし」とあり、さらに明治一四年の五月二七日の『七一雑報』は、「岡山は教会設立以來著るしき進歩と申する者は安息日学校の事なり校長はベリー氏にして諸事余程都合よし、又陶器製造所に於て其職工に普通学科を教ふるの外安息日学校を教ることなるが生徒三、四十名あり」とその経過を伝えている。

この記事によれば陶器製造所では安息日学校だけでなく普通学科も教えていたようである。また開校式に県庁の役人、新島襄が出席していることをみると、そこに伝道展開の大きな期待が寄せられていたと考えられる。さらに、普通教育と平行して行なわれたというこの事例には日曜学校活動の多様性が示されている。岡山教会は、明治一五年には紙屋町の会堂とは別に大黒町徳田屋（信徒の家）にも安息日学校を開校している。

(その三) 備中高梁伝道 「……此地に道の伝りしは明治十二年の春、同地の柴原某(宗助)氏県會議員となりて

岡山へ在勤中同所に於て当時伝道に尽力され居たる中川氏と交り且同氏の紹介によりてベレー氏にも面会し道の話を聞しが其等の縁により其後遂に金森、中川両氏を始とし内外諸氏屢々該地に伝道し、又同年の十一月より同所の医師結合して施療所を設け毎月岡山よりベレー氏を迎へて患者に療治を施すことを始め且傍ら伝道をも為居たりしが遂に昨年(明治十三年)七月一日の安息日学校を設け当時同志社速成神学校より歸られたる二宮(邦次郎)氏を始とし並に柴原氏主任となりて講義をなし其他処々に集りを設けて福音を伝へ……」と『七一雑報』(明治十四年一月二十八日)は高梁伝道の経緯を報知している。

柴原宗助は中川横太郎の出合いからベレーを知り、それが、この地で医療伝道という形で展開されることになるが、これに金森、新島襄が協力している。新島の紹介で、当時、高梁の小学校にて教鞭をとっていた二宮邦次郎が同志社に入学し、デイビスに師事し、明治十三年六月、速成神学科の課程を終えて帰郷し、この地の出身者として伝道に献身する。

二宮が、最初に着手したのは安息日学校であり、これは片原町森島宅にて明治十三年(一八八〇)七月四日に開始された。同月一八日には、ベリー、金森らの出席を得て開校式を挙げた。このときベリーは概要次のような祝辞をのべている。「キリストが、悩める幼子よ私のもとに來なさい、そして、永遠の生命を得んと思う者は、それを聖書に求めなさい。そうする者は私を証する者である」と語られて以来、聖書を学ぶことが大人にも子どもにもキリスト教への第一歩とみなされてきました。聖書を学ぶには安息日学校をおいては外にそれによさる方法はありません。国家や個人の幸福にとって安息日学校の重要性は広く認められており、指導的な人達は安息日学校の教育に積極的な役割を

になっております。聖書の教えは、すぐれた信仰に、また強いキリスト者としての特性に不可欠であり、この安息日学校は幼い日にこれを学ぶ人を助け、また国の発展に大きな影響力を与えるものと期待しています。聖書が人間を救済し、真理を示すものとして人々に学ばれ、さらに避地にも安息日学校が設立されることを祈ります」と。これが高梁伝道の拠点となり、柴原宗助、赤木蘇平、福西志計子らをはじめとする地域の信徒の献身によって展開されることになる。

明治一四年（一八八二）に至り、高田敏三郎氏宅に安息日学校は移され、同時に岡山教会所屬としての聖書講義所が開設される。高田は同志社に入学することになるが、この頃『七一雑報』（明治一四年七月二九日）によれば、「……留岡幸助（一五歳）氏は此道の真にして人間の信すべき教なる事を悟り少年社会を導き出し、去る頃より青年会を開き火曜日毎に相集りて互に演説などをなし今は頗る結果も見へだしたり……」とある。つまり青少年への伝道活動として青年会が結成され、留岡幸助がこれに意欲的な活動を始めたということである。

これと同時に注目すべきことは、柴原、金森、新島によって覚醒された福西志計子、木村静の二人が、やがて婦人会を結成することになるが、小学校の教師であった彼女らは明治一四年七月、その職を辞し、キリスト教的な女子教育の機関設立を思念したことである。これは、同年一月「私立裁縫所」として実現し、明治一八年には順正女学校となった。

柴原、ベリー、金森、二宮らの献身でこの地に開始された安息日学校、聖書講義所は、教会形成の基礎となつて、明治一四年（一八八二）四月、高梁教会創立に至る。安息日学校は、その後も活況を呈するがその一端を『七一雑報』（明治一六年七月一〇日）は、次のように伝えている。「安息日学校の生徒一団結をなし人員凡廿余名、火曜日毎に市

中にて耶穌教の演説会を始めしに聴衆數百人……此童子の働きによりて耶穌に導かるる大人少からず又此童子の親達の中にハ信者もあれども不信者の方多分なれば我子の愛に引れ教えを悟り神の国に入んとする者多し、此童子等はいずれも日々小学校へ通學する者なるか昨年頃までは甚だしき迫害を受けたりしも本年は人数の増しにより僅に六十人許の安息日学校生徒が七百人余の生徒を庄へ最や今日にては迫害を免れたり斯る景況なるにより……寺の僧侶は……防禦の術を尽せども更に善術もなく殆ど迷惑して居との事なり……」と。著しい迫害の中で、日曜学校の生徒と前述の青年会がこの地の伝道に大きな役割を果している点は注目すべきことである。

(その四) 備中笠岡伝道 備中笠岡への伝道は、明治一〇年五月からで宣教師アッキンソン、小崎弘道、横山(二階堂) 円造がまず、この地域にて福音を伝播する。その後吉田作弥が、また一一年にはアッキンソンが山田良斉、婦人宣教師ダッドレー、バロスを伴つて伝道し、この地に柚木吉郎、桑田定吉、江浪喜平らを協力者として得た。明治一六年に至るまで同志社関係者が毎年、伝道を繰返し、明治一六年六月、同志社学生松尾敬吾によって、ようやく講義所が開設された。

『七一雑報』(明治一六年九月四日)によれば「去る七月十日西京同志社の松尾敬吾氏伝道に來れる早速仮に講義所を設け会を開きしに十四、五名より二、三十名と追々増加せしにより去月の九日より他の場所柄よき所に講義所を転じ其夜より講義を始しに書物を手に持者のみ二十五名あり其他聴衆家の内外に満ち皆静にして能聴たり……」とある。この記事の後半には「又神戸英和女学校の生徒にて現今夏休の爲に帰りをる江浪常女、星野重女兩人の發起にて安息日毎に近場の童子を集め安息日学校を開き旧約の話などを爲に童男女三十四、五人も集まり其親達も之を喜び居よし同地の信者は続いて伝道者の來るやう祈おらるといふ」とあり、安息日学校の開始を伝えている。

笠岡に教会が創設されたのは明治一七年三月六日であり、今治教会の会員であった真鍋定造が仮牧師として就任した。それに至るまで六年間、多くの伝道者の働きがあった。一六年、松尾敬吾がこの地に来た頃、ようやく、祈禱会、聖書会読が定期的に開けるようになれば『天道溯源』の講義で多くの聴衆を集めていた。笠岡は戸数二〇〇〇戸ほどで、寺院の数は一五を数え、当時、「和合社」と称する「耶穌防禦」のための結社があり、キリスト教伝道には厳しい土地であった。この地に、前述の神戸英和女学校の生徒江浪常、星野重が日曜学校を開始したことは特筆すべきことである。彼女らが開始した日曜学校は夏休み中のことであるから、夏休み以後どのように継承されたか明確でない。江浪は前述の喜平の娘で、後に学校名は明らかでないが教師になり、また星野は高梁の順正女学校の教師となった。これは、キリスト教学校の生徒が郷里で伝道活動に従事した一例であり、日曜学校から教会形成へという発展に大きな役割を果たしたものと注目すべきである。

(その五) 丹波の亀岡伝道 丹波亀岡で伝道が開始されたのは、明治一〇年のことで、金森通倫、海老名弾正が、堀金太郎(貞一)と共にこの地方の伝道に着手した。一一年以後は、堀が主として福音伝播の開拓に献身する。堀は同心社と称する結社を組織し、滝川猪兵衛、村上太五平らと教会形成の基礎を固めた。

その後、『七一雑報』(明治一三年九月一三日)によれば「……堀氏からの来報に安息日には日曜学校と説教の二会を設け説教は柳町村上氏の宅に設けられしに集まる人は二十人ほどもあり其他火曜日には女の集を信者の宅に設け金曜日には同氏の寓宅に説教を開かる事なるがこれには五、六十人も集まるよし」とある。この記事によれば、明治一三年に日曜学校が開設されている。日曜学校の実態については詳でない。だが、講義所の開設とこの日曜学校の開始は、明治一七年六月二九日の教会創設に至る重要な布石となっている。

さて、こうした日曜学校の開始から教会形成へと至る例は、以上の外には天城(明治一七年一月設立)、倉敷などの教会成立過程にみる事ができる。

これら日曜学校をみると、まず、阪神から岡山を中心とした伝道にはベリーの医療伝道と、それに呼応して、日本基督教伝道会社より派遣された同志社の神学生の働きが顕著であること、とりわけ宣教師の指導で日曜学校が開設されている点の一つの特色といえる。第二に、地域によき協力者を得て日曜学校が平信徒によって支えられたことである。高梁教会では柴原宗助をはじめとする信徒が、また、岡山教会では時代はややおくれるが河本乙五郎のように明治二〇年、一八歳のときからその生涯を日曜学校に献身した例もあり、さらに笠岡教会のように神戸英和女学校の生徒によって開校された例をみると、平信徒の日曜学校に対する関心度の高さと、また貢献を認めることができる。

第三に、日曜学校が地域に定着して、その地域の福音伝播の担い手を養成する母胎となったことをあげることができよう。教会は、その地域に定着する信徒によって維持形成される。信徒が転出、移動しがちな場合、教会の維持は困難となる。第四に、日曜学校の開始が地域への教育に刺激を与えたことである。岡山での陶器職工に対する教育は、その一例であり、また、高梁での「私立裁縫所」も、日曜学校活動と無縁ではない。これとはやや異なるが浪華教会のように大阪英語学校の生徒に働きかけ、田村初太郎や外人教師を中心に日曜学校を開始した例もある³⁸。第五に、これら日曜学校が自給伝道の一環として展開されたことである。それは前述の伝道会社の方針によるものである。これとは異なつて松本教会のように米国神学校生徒より援助をうけた例もある³⁹。上田教会の日曜学校も、米国の日曜学校生徒から寄付金が贈られている(『七一雑報』明治二年八月八日)。以上のような特色は、明治一〇年を前後とする開拓伝道において開始された日曜学校に比重的相違はあれ共通している。

明治一七年における日本基督伝道会社の年会の統計によれば、その関係教会は笠岡教会(明治一七年三月創設)までを加えて二二カ所に設立され、日曜学校の生徒数は平均数、毎回一六一一名となっている。各地域の教会の日曜学校に数十名の生徒が出席していたことになる。キリスト教に対する迫害の厳しい農村地域において、日曜学校に出席していた生徒がどのような状況におかれていた人びとであったかは明確ではない。その実態は、把握すべき一つの課題として残したい。

四 日曜学校と小学校教育

さて、日曜学校活動が地域での教育に刺激を与えたことについて、前章で若干言及した。周知のように明治五年(一八七二)に学制が布告されてから全国に小学校が設置され、児童の就学が奨励された。だが学制第二章により、小学校は「尋常小学、女児小学、貧人小学、小学私塾」と区分されており、すべて児童が等しく教育されたわけではない。受益者負担の原則から授業料は月額五〇銭と定められた。この金額は極めて高額であり、すべての児童がこれを納入して就学することは困難であった。そのため富者の寄付金をもって運営された「貧人小学」(仁恵学校)に通学せざるをえない児童が多かった。「貧人小学」は「貧人子弟ノ自活シ難キモノヲ入学セシメン為ニ設ク」と規定されている。この規定による小学校にかかわりを持って開始された日曜学校がある。『七一雑報』によりその二、三の事例をとりあげてみたい。

(一) 鹿兒島メソヂスト教会の事例

『七一雑報』(明治二年一月二四日)によれば「……長崎より飛鳥(賢二郎)氏が鹿兒島へ行れたること(前々号)に

載しましたが、長崎の瀬川(浅)氏も昨暮より鹿児島へ伝道され当時は家族引纏めて転居されしに該地の信者は、日々加増する由にて本月(二年一月)十三日該地発の報知によれば県下天神馬場通り旧花岡の屋軸を耶穌教講義所とし毎夜七十余名の聴聞人ありて中には洗礼を望む人も有り且つ過る安息日より児童のために日曜学校を開かれたるよし」とある。

飛鳥賢二郎はメソヂイストであり、瀬川浅はスタウトの門下で改革派であった。まず瀬川による伝道で鹿児島に耶穌講義所と日曜学校が開始された。瀬川の講義所には明治一二年三月、宣教師スタウトが長崎より来援し、また飛鳥の講義所には同年三月、横浜からマクレ、長崎からデピソンが来援している。

ところで『七一雑報』(明治二年四月一日)によれば飛鳥の講義所においても安息日学校が開始されており生徒数は四二名を数えていた。他方、飛鳥は二月上旬より「教法小学校」を開き三八名の生徒を迎え入れていた。その生徒のうち三四名は受洗志願者であった。そこで、飛鳥は、すでに受洗した信者と協議し会堂、学校、伝道師の住宅を兼用する家屋の建築を決定し、四月よりその工事に着手し、入費三〇〇円の見込で募金をはじめた。五月下旬に建築は落成し、六月三日開堂式を執行し鹿児島メソヂイスト教会としての伝道体制を整えるに至った。

注目すべきことは、この会堂が平日には小学校として利用されたことである。『七一雑報』(明治二年六月二〇日)によれば「安息日には朝十時より講義あり終りて祈祷会を為し午後は二時より安息日学校をひらき夜は毎ものごとく講義あり、又平日は此処を小学校となし教師は会員よりつとめ生徒の謝儀は十銭、五銭、無月謝の三等にわかち貧生の為には自然貧学校の如き姿なり……」とある。

明治一五年(一八八二)の一二月には、クリスマスを祝し「同会に属する小学校定期試験も相済しに付同日卒業証

書を賦与し教員八名の演説あり……」（『七一雑報』明治一六年一月二日）とあり、また「……附属小学校は余程盛んにして世間の小学校よりも評判よく追々此校へ転入するほどなり……」（『七一雑報』明治一六年七月二四日）とその隆盛を伝えている。

さて、この鹿兒島メソヂスト教会の場合、講義所と日曜学校とが平行して開設され、そこから教会が誕生した。こうした事例は、これまでみてきた。だが、平日に会堂を小学校として転用し、教会が地域の貧しい子どもを迎え入れ、小学校としての普通教育を実施した例は特筆すべきである。この教会は創設当初宣教師との間に葛藤があったようであるが、その原因が小学校問題であったのか否かは明確でない。恐らく葛藤期間中、宣教師の協力は跡絶えたことであろう。そうした状況下で、この教会は信徒の自給伝道で教勢を拡大し、また、小学校をも合せて維持、運営された。

小学校は、「教法小学校」として明治一二年に開始されているが、明治一六年の段階では明らかに教会附属の「私立小学校」となっている。『文部省年報』には、明確な記述はないのであるが、この時期に鹿兒島の私立小学校の生徒数の増加は認めることができる。授業料については、当時、「尋常小学」で月額五〇銭であったから、この小学校の一〇銭、五銭、毎月謝という三種の規定は、極めて低額であった。教員が教師となっていたようであるが、教師に対する謝儀は明確でない。恐らく授業料と教会会計の一部をもって充当していたと推定される。

この小学校は、明らかに、前述の三種の授業料の額からみて「貧人小学」の性格をもっていた。教会が、このように地域の児童に、とりわけ貧しい児童に対する配慮をもって教育事業に着手したことは、キリスト教系の諸学校とは別に特筆すべきことである。

(二) 常総教会の事例

明治一二年七月一二日の『七一雑報』によれば「下総全国は先年(明治一〇年)より東京長老教会並にメソヂス(メソヂスト)会の伝道によりて追々福音のよき種が播かれて果を結ぶ田地も多くあるとかや、此頃一寸上京されし大森における同処並に法典両教会の牧師戸田氏の話に、大森、法典会堂の外に、講義所は佐倉に二ヶ所、相馬泉、手賀中峠に一ヶ所……」とあり、すでに大森、法典の二教会が設立されていた。また、明治一一年八月二日の『七一雑報』は「……長崎メソヂスト教会の飛鳥賢二郎氏は東京メソヂスト教会よりの頼みにて客月中も下総安食に伝道ありしが、本月九日にも亦派出ありて、日夜廻勉正教を施さること懇々……」とあり、下総安食教会が設立されていた。

このメソヂストの伝道は安食教会を拠点に下総の布鎌、北羽鳥村、常陸の藤蔵川峠の三ヶ所に講義所をもっていった。これは、ソーパル (T. Soper) の伝道によるもので、やがて「下総国印幡沼郡北布鎌村」に常総教会が創設されることになり、明治一五年七月に高原が牧師として着任する。この地域は開拓地で生活状況は極めて厳しかったようである。

この教会について、『七一雑報』(明治一六年一月二日)は「……平生は学校となりし多くの子弟を聚て小学科を教授す、教員は加州の人桜井氏なり、安息日には高原氏子弟に日曜学校を教授し後に説教せり」とあり、平日は小学校となっていたようである。だがこの教会の場合、教員は「加州の人桜井氏なり」とあり一名であったとみられる。とすれば「小学私塾」的であったのかもしれない。いずれにせよ当時、鹿児島的事例にしても、この常総教会の場合も届出により認可を受けねばならなかったから、学制による小学校区分のいずれかの規定に基づくものであった。

(三) 長野県下の類似例

鹿兒島、常総の両教会にみるような小学校には至らなかったが、長野県下にも類似事例がある。それは、「長野県下なる信濃国埴科郡坂木村は人口九百戸ありて宗旨は禪浄土なれど念依題目を唱ふ人は更に聞かずという皆今日欲を専とするのみ此に住せる松代教会宮原草臣氏は一昨年(明治一三年)より日曜学校を起し十五、六人の子供に孜孜として教授せられたり、同氏は赤貧といひ且つ其妻君多病にして子女もある上に種々苦惱堪へがたき情^{あり}質ある中神道を伝へらる……斯る人を扶助するものあらば其の悦びや大なるべし」と『七一雑報』(明治一五年一月二日)に報知されている事例である。

これは、あえていえば、私塾的な日曜学校であり、また教会の伝道所的作用になうものであった。松代教会には酒造業から荷車挽に転業し、さらに養蚕業に変わり「安息日を堅く守り、安息日には蚕に桑を与へざりし……」と安息日を厳守した内山国治なる信徒が宮原と同じ時期にいた。キリスト教に対する迫害と、農村社会の厳しい仕組の中で宮原が開始した日曜学校は、福音の伝播と共に地域の子どもたちに対する教育への熱意をこめて開始されたものとみることができ。これは平信徒が伝道を広く教育という視野のもとに展開した例といえよう。

この坂木村には明治一六年五月一六日、ソールが松代教会の牧師大貫文七と共に応援している。大貫は常総教会の創設に献身した大貫七右衛門の子息であった。

さて、以上の三つの事例は、坂木村の宮原の例はやや異なるとしても、教会が小学校教育に関係した事例である。しかし小学校教育という点からみると、それは教会というより日曜学校と深い関係をもった。当時「小学校を設立

すべしとの学制による布達で小学校熱は至るところ頂点に達していた。宗教などは無用の沙汰なり、人知は人間の「万事」³⁸という風潮の中で、それに対抗して「耶穌を講義する学校」すなわち日曜学校の展開は容易でなかった。そこで、当時の「小学校熱」に着目し、それに対処したことは賢明な策であった。

だが、それは賢明な策というだけではなく、次のことにも関係していた。教育令（明治二年）で、(一)「学制」による学区制が廃止され、町村ごとに公立小学校を設けることができるようになったこと、(二)私立小学校がある場合は、それを代用できるとされたこと、(三)また修業年限も、地域の事情により八年を四年にまで短縮できたこと、(四)学校以外の場所で教育を受けても就学と認められたこと、(五)それにより公立小学校を廃止する所も出たことである。以上のことから教会が、とりわけ日曜学校が、小学校の代用を果しうる状況が生じてきた。明治一三年の改正教育令により学校設置は、府知事・県令の認可を必要とするなど再び厳しくなるが、受益者負担を強制した当時の小学校においては、鹿児島のような貧人学校的小学校は、地域の実情からみて一つの救済策であった。また常総教会の事例にしても僻地の厳しい実情を救済するものであった。学校の校舎を貧しい町村の負担で設立しなければならなかったとき、少なくとも数十名を収容できる場であった教会堂が、それが新設されたものであればある程に、地域に対して平日開放されたことは伝道上也大きな意味をもっていたとみなければならぬ。

しかも、それがキリスト者たる教師によって、貧富の差を越え、知識の有無を問わずすべての児童を迎え入れる体制を整えようとしたことは、山村僻地、農村に根強く存続していた封建意識や身分制度に、人間解放の新しい意識を覚醒させる契機になった。小学校教育と関係した日曜学校は、その意味で極めて貴重な役割を果たしたといえよう。しかし、そこには、つねにキリスト教に対する迫害と、村落共同体の厳しい因襲、習俗との戦いのあったことをみおと

してはならない。

五 日曜学校の内容

これまでわが国の日曜学校の成立過程を考察してきたが、その日曜学校の内容はどのようなものであったのだろうか、プログラム、教材、方法などについて整理しておきたい。

(一) 日曜学校プログラム

『七一雑報』（明治一一年三月一五日）によれば、静岡の梅屋町三番地（明治七年九月創設の静岡メソヂスト教会）では「午後一時三十分より十分間奏讚美歌第五十一、奉禱文、同四十分より三十分間教授、第一例教師（マクドナルド）英文バイブル男生十五名、第二例同妻君（マクドナルド夫人）英文バイブル女生五名、第三例山中（笑）氏（マクドナルドより明治七年九月受洗）日本譯馬太伝講義男女十六名、四例寄木氏、ガールド幼童男女十五名……同二時十分ヨリ二十分間奏讚美歌第五十二、問、マクドナルド氏、答、出席生徒各員、奉禱文出席員読上、奏讚美歌第一、同三十分退散……」とある。この教会では、讚美歌、奉禱文、バイブルクラス、讚美歌、問答讚美歌と日曜学校プログラムが明確にされており、バイブルクラスは年令別、（英文のクラスは男女別）に編成されている。このプログラムの中心は聖書教授であり、讚美歌で始まり奉禱文、問答を取り入れ讚美歌で終っている。⁽²⁷⁾これは当時としては、極めて整ったものであり、いわば日曜学校プログラムの原型といえよう、また、日曜学校規則をすでもって運営されてもいたようである。

一般的に、当時日曜学校は午後に行なわれていたようであるが、松本教会の場合は、「五時より素読をなし八時に至る天授氏、養子芳三郎氏と二名教育に尽力せり、午後二時半より友成、藤田の二勸士を添て教導殊更に勉む故に教会に來り聖書に従事するもの益々おほく日曜学校毎に四十名を過ぐ……」（『七一雜報』明治二年四月二十五日）とあるように早朝より行なっていた事例もある。松本教会では、対象が主として青年であり、地域の向学心に燃えた若者に伝道を意図していたようであり、静岡メソヂスト教会のケースとはやや異なる。だが、松本教会の事例は、地域的な事情に対応した当時の日曜学校の一形態であり、こうしたプログラムが地域的には大半であったとみる事ができる。讚美歌や奉禱文、問答などがあつたり、またなかつたり、あるいは聖書講釈が全体を占めていたりして、日曜学校プログラムは、まだ一定しておらず、地域的事情によって多様であつた。

(二) 日曜学校教材

日曜学校が児童を対象とする場合、もちろん聖書が主たる教材であつたが、それを扱うのには補助教材が必要であつた。例えば、キダーは「日本児童にはキリスト一代記の大きな掛け画図などを見せて説話した³⁸⁾」ようであるが、当初そのような教材は殆んどなかつた。

こうした補助教材的なものが出版されはじめたのは、明治九年のことである。十字屋から日曜学校カードが発売された。明治一〇年一〇月一九日の『七一雜報』は、これを「東京十字屋にて安息日学校訓誠紙^{カド}を銅版にて制作たるに至極奇麗なれば安息日や説教所のおくばり物に願いたい者だと同店より申しこされました……」と伝えている。このカードは日曜学校のみならず広く利用されたようである。このカードには「田村有成画、美術絵画、教の札」とあり

「自己を主の前に卑せよ、然ば主はなんぢらを高くせん」とか「懼る勿、我爾と共あり」とか、「エホバヲ畏ルル女ハ譽ラレン」などの言葉が日本画の中に記入されている。また明治九年、婦人子ども向けの定期刊行『よろこびのおとづれ』が出た。これは、明治一五年三浦徹により『喜の音』となった。

明治一三年九月に至りダッドレーが『育幼俾』を出版した。これは、『七一雑報』にすでに一部が掲載されていた。『七一雑報』（明治一三年九月一七日）は「……実に子を教育する為には最も善き書にて世間の婦女子は必ず一読すべきものなり文章は解り易くして所々に絵図を以て示し定価は一冊二十五銭なり」と紹介している。恐らく日曜学校にも参考書として利用されたと思われる。

明治一三年には九月に田村直臣編の『童蒙道のしほり』が出版されている。これは、「……米国出版の日曜学校教科書より翻出し傍ら東洋の美事善行苟も風教に益ある者を抜萃したる者なれば日曜学校教科には至極善本なり」（『七一雑報』明治一三年九月二四日）と広告されている。

また、同じく九月に奥野昌綱、手塚新訳の『絵入 心の鏡全』が十字屋書舗より出版された。これも「……支那羊域にて其日曜学校の為に譯述せし者を今又邦語に翻譯し每章絵図を挿入したれば一見して善人悪人の心中を知るに足りて亦日曜学校の教科書には至極善本なり……」と『七一雑報』に広告されている。

明治一四年には佐藤喜峯の『和譯天路歷程』が十字屋より出版された。これは、すでに、『七一雑報』の明治九年四月一〇日の一〇号から毎号に「天路歷程意譯」として連載されていた。また、明治一一年六月一四日の『七一雑報』には、『天路歷程』が佐藤喜峯の校正により近日出版とある。注目すべきことは、この「天路歷程」を含めて『七一雑報』は、明治九年以来「善良童子のはなし」とか「正直な子どものはなし」とか「神の語に心を満したる童の話」

とかさまざまな説話を掲載し、児童文学の翻訳をも紹介していることである。恐らく、『七一雑報』のこうした説話、児童文学は、とくに日曜学校関係図書が出版される以前から、教材としてかなり用いられていたと思われる。明治二三年に出版した本間重慶の『安息日学校読本』は、『七一雑報』や『福音新報』に掲載したものを一巻にしたものであることからみてもそのように推定される。

明治一五年には香雨女子(沢山保羅夫人多可の妹佳志のこと)の翻訳によって華兒頓わにんとん女著、小説『世を渡るたつきの風琴』が福音舎から出版された。その一部は『七一雑報』(明治一五年一月三日)に掲載されている。

以上のような出版物の経過をみると、児童を対象とする日曜学校の教材が流布したのは明治一三年から一五年にかけてである。しかし、まだ、その数は少なく、出版物が十分に活用されたとは思えない。だが、その間、前述のように『七一雑報』に掲載された翻訳文や児童向の話は、購読者を通してかなり利用されていたとみることができよう。

(三) 日曜学校の教授法

『当初の日曜学校の教育方法は、問答式、教理的カテキズム教育が中心であったが、次第に聖書中心の教育へと移行し、問答式からイエス伝を中心とする聖書物語、講話式に移っていった』⁹⁹ ようである。神戸教会なども、当初、日曜学校は、午後、タルカットによって聖書と教理問答が扱われていた。¹⁰⁰

講話式では、J・B・ヘールが明治一三年から創世記の一部や、またモーゼの天地創造の記事を用いていた。これはかなり興味を集めたようである。また、ヘールは「われわれはデビス大佐の『キリストの生涯』とアポットの『キリストの生涯』の挿絵とを使ってきました。これらの絵は、一言説明するだけで、片言の日本語の説教全体よりも内

容を明確にします。目から心へが宣教師にとって重要な原理です。……と挿絵による視覚的な教授法を採用しキリスト物語を扱っている。さらに、こうした物語の中で聖句を解説し、その暗誦を課している。このような講話式は、キダーもすでに試みていたが、ヘールが提唱するように「目から心へ」の原理は、当時の日曜学校での重要な教授法であった。

この外に注目すべき方法は「間接的方法」である。明治二三年、本間重慶の『安息日学校読本』が、福音舎より出版されるが、その序文には「安息日学校は信徒の信仰を培養し、未信者を誘導啓発する者なれば、伝道上必須の機関たり」とあり、「今日の教科書たるたゞ一巻の聖書あり、是固より至宝至重の書、須叟を欠く可らずと雖も一意之れを幼童の頭脳にまで注入せんとする時は徒らに倦厭の念を生ぜしめ從來また之を繙くを欲せざるに至る。然らば先づ間接に種々の談話に依り漸々之を導くことを為ざるを得ず」と「間接的方法」を力説している。本間の『安息日学校読本』は「幼年の時より信仰心を発しむる必要なる談話を教へ又は地名、人名等を習熟せしめて、後來聖書を読むに當り理解ならしめんとするに在るなり」と、その出版の目的を明記している。また、生徒の年令を考慮して第一巻は幼児に「図画によつて教へ」、とあり、第二巻以後のものも、それに続いて生徒の年令、学力に応じて編集されている。こうした佳話、童話、社会道德的教訓をもつて教育する方法が、明治二〇年代に普及するに至った。

四 日曜学校での試験

さて、以上の教授法に加えて特筆すべきことは、試験が行なわれていたことである。これが、最初に、いつ、どこで実施されたかについては明確でないが、今治教会（明治二年九月創設）においては明治一五年に実施されている。

『七一雑報』（明治一五年二月一〇日）は、その模様を「去月……午后は安息日学校生徒の試験あり幼なきは満三ヶ年内外より四、五ヶ年位なるが呼出に応じ長敷母おとなくの膝より下り教師の面前に進みより礼儀をなしてのち、教師の差図により廻らぬ舌ながらも主の祈りを暗誦し終つて、真神は幾何あるや、真神は何に居たまふや、イエスの母の名は何と云や、父の名は何と云や、宮にある神々は真神なるや、イエスは何国に生れたまひしやなどの問答にて各級とも其点数に同じ賞品を授けしか一方ならぬ快会なりし……」と伝えている。前後するが、明治一四年五月に、常総教会でもソーパーが実施している。浪華教会は試験委員を選出して実施している。

聖句の暗誦は毎日曜日ごとに課せられていたが、それに加え、こうした試験を実施したことは、第一に、試験の結果により賞品を授与し、日曜学校への出席を奨励する意図からであり、第二に、当時、小学校でも、そのような策が勉学のすずめとして採用されていたことに関連している。

(四) 日曜学校行事

日曜学校行事として、前述の試験もその内に含めることができよう。しかし主たるものはクリスマス祝会であった。クリスマス祝会が最初に行なわれたのは明治七年一二月で、東京築地のカロゾルス宣教師の東京第一長老教会（新栄教会）であったと伝えられている。そのとき、クリスマス・ページェントが行なわれている。明治一〇年には東京の諸教会は、いずれも盛大にクリスマスを祝するようになり、また、キリスト教系女学校でも、例えば「原女学校、築地海岸女学校にては生徒の暗誦、弹琴、讃歌などありて甚はだ美はしく見物人も多かりしよし……」（『七一雑報』明治一一年一月四日）とあるように活況を呈した。当時わが国では極めてめずらしい催物であり一般の見物人も多

かったようである。また、外国の例にならない、出席のよい生徒には賞品が与えられ、菓子なども用意されていた。クリスマスは、まさにキリスト教を一般に特色づける行事として、また、児童には興味、関心を持たせる行事として重要な意味をもっていた。

クリスマス祝会の外に注目すべきは、日曜学校の野外礼拝である。これは、すでにふれたように、神戸教会が明治八年に実施している。これはキリスト教のデモンストレーションとしても大きな意味をもっていた。

デホレスト (J. H. DeForest) が「聖教を伝えんとするに……その働きに就いては色々の仕方あり……」(『七一雑報』明治一〇年四月六日)と論じている中で、キリスト教をいつも目にふれさせることが伝道上、必要と力説している。その意味では、こうした行事は子どもたちの関心を引くのに効果があったといえよう。

問題は、教会への継続的な関心であり、とりわけ日曜学校に毎週出席するように子どもたちをいかに、つなぎとめるかであった。日曜学校カードとか、前述のクリスマス祝会や、試験などにおいて与えられた賞品とか、教会の諸行事は教会への継続的関心呼び起こすのに重要な意味をもっていた。

ところで日曜学校の重要性が、わが国キリスト教界で、かなり自覚されるようになったのは明治一〇年以降といえよう。この年から毎年、年始には「安息日学校の為に祈る」という祈祷主題がかかげられるようになった。これもまた行事の一つに数えられよう。日曜学校活動が、わが国キリスト教の担い手を養成する機関として重視され、諸教派が、それぞれ本格的にその整備、充実にとり組むようになったのは、まさにこの祈りがはじまったところである。

以上、明治初期、わが国日曜学校のいわば揺籃期について考察してきた。主として『七一雑報』に依拠したことが

ら萌芽期、日曜学校の全体を考察したとはいいがたい。また従来の研究を部分的に加筆したにすぎない。明治初当、極めて厳しい状況下で、キリスト教伝道の前衛的役割を果たした日曜学校が、今日、「教会学校」として継承されつつも教勢に低迷の影をみるとき、その原因を歴史的経緯において検討せねばならない。当初、日曜学校教師はまだ少なかったと思われる。そこで教師養成が課題となった。また日曜学校といっても、それにふさわしい建物、教室があったわけではない。さらに、西洋では、宗教教育を家庭での役割とする風土があって、日曜学校は独自の役割を明確にしうる。だがその風土を欠くわが国での日曜学校は、宗教的経緯、知識、訓練のすべてに対応せばねならなかった。こうした問題は、いまもお負わされている課題である。これについての言及は、改めて行なうことにしたい。

- (1) 小出正吾著『日曜学校の歴史』(宗教々育講座) 基督教出版社、昭和九年、一四ページ。
- (2) ジェームス・アトキンス著(大谷真訳)『児童の宗教』教文館、明治四八年、二六一ページ。
- (3) 小出正吾著『日曜学校の歴史』二七—三〇ページ。
- (4) バラ・マカルビン『日本伝道百年史』宣教記念誌発刊編集委員会、二六ページ。
- (5) 高谷道男著『ドクトル・ヘボン』牧野書店、一九五四年、一四六ページ。
- (6) 同書、一五二ページ。
- (7) 『指路教会八十年史』この教会は明治一年には鎌倉本吉町にも安息日学校を設け、伝道を拡張している。
- (8) 高谷道男著『ドクトル・ヘボン』二三七ページ。
- (9) 日本日曜学校協会編纂『日本日曜学校史』日曜世界社、昭和一六年、四一—五ページ。
- (10) 瀧澤四郎著『ヘボンと恭助』日曜世界社、昭和一四年、七〇ページ。
- (11) 『日本日曜学校史』六ページ。

- (12) 小出正吾著『日曜学校の歴史』(宗教々育講座)基督教出版社、五四ページ。
- (13) 高谷道男著『ドクトル・ヘボン』三二七ページ。
- (14) 同書、二二六ページ。
- (15) 山本秀焯著『新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』聚芳閣、大正一五年、二四ページ。
- (16) フェリス女学院一〇〇年史編集委員会『フェリス女学院一〇〇年史』一九七〇年、二七ページ。
- (17) 『フェリス和英女学校六十年史』一七七ページ。
- (18) 『梅花学園九十年小史』一一二ページ。
- (19) 『福音新報』(明治一六年九月四日)、神戸英和女学校生徒「江浪常、星野重両人の発起にて安息日毎に近場の童子を集め安息日学校を開き旧約の話などを為に……」とある。
- (20) 『福音新報』(明治一六年九月一日)は紀州熊野新宮、梅花女学校の大石陸世の伝道活動を報じている。
- (21) 『日本日曜学校史』一四ページ。
- (22) 『弘前教会五拾年略史』大正一四年、五ページ。
- (23) 小出正吾『日曜学校の歴史』五八ページ(『日曜学校の友』第一六七号)。
- (24) 小出正吾『日曜学校の歴史』五八ページ(『日曜学校の友』一四八号)。
- (25) 『七一雑報』(明治一二年三月二八日)には浪華教会の福島彌助が安息日を厳守するための生活上の工夫が、また、明治一六年九月二五日の『福音新報』には信州松代教会の内山国治の厳しい生活の経緯が紹介されている。福島彌助は明治一二年三月、柳川旧藩邸内に日曜学校を開設している。
- (26) 小出正吾『日曜学校の歴史』六〇ページ。
- (27) 前掲『日曜学校の歴史』六五ページ。
- (28) 『指路教会八十年史』一一二ページ。
- (29) 湯浅与三『基督にある自由を求めて』昭和三三年、創文社、七〇ページ。
- (30) 『沢山保羅研究』四号、梅花学園、一〇五ページ。
- (31) 『日本基督教教会歴史』大会出版委員出版、明治三〇年、四六ページ。
- (32) 『岡山教会史』昭和三〇年、三ページ。
- (33) 『七一雑報』(明治一一年一〇月二日、一〇月二五日、一二月二九日、明治一二年一月一七日)。
- (34) 『七一雑報』(明治一二年一月三日)によれば「米国神学校の生徒より信州松本ソンドンデースクールの生徒へ学業の進歩を助けんとして波濤万里を隔てし所より河村天授氏を指て金一二円を贈られました……」とある。
- (35) 湯浅与三『基督にある自由を求めて』一一八ページ。

(36) 山本秀焯編『日本基督教会史』日本基督教会事務所、昭和四年一〇月、三六ページ。

(37) 讚美歌は、明治五年九月五日付 譯者報告書によれば、Jesus Loves me, this I Know 四六一番がバラ夫妻によって訳出されていた。四六一番は日曜学校讚美歌である。また、明治七年四月、神戸教会では設立当初「組合教会讚美歌」なるものが使用されていた。

(38) 『フェリス和英女学校六十年史』一四一―一五ページ。

(39) 『指路教会八十年史』一一二ページ。

(40) 『神戸女学院百年史』一四一ページ。

(41) J・B・ヘール『日本伝道二十五年』大阪女学院、一九七八年、五六ページ。

(42) 『日本日曜学校史』一五ページ。

(本稿は東京女子大学、松川成夫教授、および同志社大学、杉井六郎教授より貴重な示唆をいただいた。末尾ながら謝意を表したい。)